

〔共同研究：インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究Ⅱ〕

スンバ人のバリ島への移動

小 池 誠

はじめに

本稿は、2010年度から3年間続いた地域社会連携研究プロジェクト「インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究Ⅱ」（10連208）の2番目の報告である。本研究プロジェクトは、これまでインドネシアに関心をもつ本学教員が実施してきた共同研究プロジェクトを発展させたものである。すなわち、インドネシアのバリで実施されてきた国際ワークキャンプ（IWC）の経験を基盤にしつつ、歴史学・文化人類学・宗教学・キリスト教学・言語教育などさまざまな研究分野から、インドネシアの社会と文化に対して総合的な視点でアプローチすることを目指してきた。

本研究プロジェクトでは、以下に述べるような二つを中心として研究活動を進めてきた。第一に、国際ワークキャンプに関する調査研究と活動が挙げられる。国際ワークキャンプは、様々な形でバリ島・プリンピンサリの児童擁護施設の改善に努め、桃山学院大学、ひいては日本とインドネシアとの交流を進める上で大きな実績を上げてきた。第二に、インドネシアとの文化的交流を進めるための基礎的研究と位置づけることができる研究活動である。おもに深見純生と小池誠が実施してきたインドネシアにおける現地調査・資料収集が挙げられる。深見はおもにジャワの歴史について研究を進め、一方、小池はスンバの社会と文化およびインドネシア全体のメディアを中心として研究を続けている。

本稿では、スンバ人のバリ島への移動に焦点を当てて、現代インドネシアにおける移動の問題を考えてみたい。スンバとバリを組合わせたテーマで報告書を書くのは、次のような意義がある。まず最初に、本学とスンバ島との関わりである。インドネシア東部にあるスンバ島は、ワークキャンプを通して桃山学院大学とスンバとのつながりが深い島である。1992年から95年にかけて合計4回のワークキャンプが、東スンバ県のラクワトゥ（Rakawatu）でキリスト教系農業学校の助けで実施された〔桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプ実行委員会 1997〕。また筆者自身が、ウンガ村を含む東スンバ県ハハル郡（当時はハハル分郡）で1985～1988年にかけて社会人類学的調査¹⁾を実施し、その後も東スンバ県で継続的に継続

1) この調査で得られたデータを使って、筆者は東京都立大学に提出した学位論文「東インドネシアの家社会——スンバの親族と儀礼」を執筆し、それを後に同名の単著〔小池 2005〕として公刊した。

キーワード：国内移動、家事労働者、ネットワーク、家族

的に調査を続けている。その研究活動のなかには、2010年度から3年間にわたる桃山学院大学特定個人研究費「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」にもとづき実施した調査²⁾だけでなく、2007年度から2009年度に実施された地域社会連携研究プロジェクト「インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究」の一環としてウンガ村で慣習家屋再建³⁾も含まれている。一方、バリ島は、すでに触れたように、国際ワークキャンプの訪問先である。

以上明らかにしたようなスンバ島とバリ島の関係を人の移動という観点からアプローチするのが、本稿の目的である。ただし、このテーマの研究は始めたばかりの段階であり、本稿は現時点で集まっているデータを報告するだけで、深く掘り下げることはできない。なお、本稿の一部は、2012年4月19日に本学で実施した本研究プロジェクトの研究会で「バリのスンバ人家政婦」と題して発表している⁴⁾。

1 スンバにおける移動と家族

この章では、スンバ人のバリ島への移動を取り上げるための前提として、スンバにおける移動（移入者と移出者）の概要と、移動と関連する家族と世帯の問題を考えてみたい。移動といっても、1990年代後半よりインドネシア全体で増加してきたグローバルな移動ではなく⁵⁾、スンバの場合は現時点では国内移動にとどまっている。

1-1 スンバ島と人の移動

歴史的にみて、スンバ人は周囲の島々に住む諸民族、たとえばサブ人⁶⁾や、ロティ人⁷⁾、フローレス島のエンデ人⁸⁾と比べて、移動性 (mobility) の低い民族といえる。スンバ人 (スンバ語で tau Humba) は、スンバ島の圧倒的な多数派民族であり、スンバ人はそれぞれ出身の地をもち、そこにはアイデンティティの源となる氏族 (*kabihu*)⁹⁾ の同胞が住んでいる。

2) 調査の成果は、小池 [2012a, 2013c] で報告している。

3) 慣習家屋再建プロジェクトの経緯とその過程で明らかになった問題点は、小池 [2010, 2011] で報告している。

4) 深見純生氏をはじめとする参加者の発表に対する貴重なコメントに感謝したい。

5) 台湾におけるインドネシア女性労働者のネットワークについては小池 [2012b] で、また台湾から帰国したインドネシア人労働者の活動については小池 [2013a] で報告している。

6) サブ人 (Orang Sabu) はもともとスンバ島の東に位置するサブ島とライジュア島に住む民族集団で、オランダ統治時代にもスンバ島に移住した [Fox 1977]。東スンバの県庁所在地ワインガブと東スンバ島の北岸地域にサブ人の集落が広がっている。

7) ロテ人 (Orang Rote) はティモール島の西に位置するロテ島に住む民族集団で、おもにティモール島の西の端にあるクパン (東ヌサ・トゥンガラ州の州都) に移住する人が多く、キリスト教化の関係で、教育水準が比較的に高い [Fox 1977]。

8) エンデ人 (Orang Ende) は、スンバ島の北に位置するフローレス島中部にある港町エンデの出身者である。東ヌサ・トゥンガラ州の住民の中では珍しくムスリムが多数派で、スンバ島のワインガブにも居住している。スンバ島にオランダ統治が確立する以前は、奴隷狩りを目的としてスンバ島にやって来た。

9) 本稿では、スンバ語のみイタリックで表記している。

とはいえ、本稿で説明するように島外へ出て行くスンバ人もいれば、逆に、スンバ島に入ってくる人々もいる。東スンバ県の県庁所在地であるワインガプ (Waingapu) の商業地域を歩けば、立ち並ぶ店舗の経営者はほぼすべて華人 (Orang Cina) であることが分かる。この点では、インドネシアの他の地方と状況は同じである。ブギス集落 (Kampung Bugis)¹⁰⁾ と呼ばれる一画がワインガプの海岸部にあり、また上述のエンデ人が集住している地域もある。ブギス人とエンデ人のようなムスリムの民族がワインガプに住んでいるので、2010年の統計では人口の35.4%がムスリムになっている [Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2011: 198]¹¹⁾。またサブ集落 (Kampung Sabu) もある。サブ人はスンバ人よりも先にキリスト教化が進み、そのため教育水準も比較的に高く、公務員や学校教師に就くサブ人が多い。この他、警官にはバリ人が多いと言われる。さらに、屋台 (warung) で食べ物を商うジャワ人もいる。

スンバの都市部では、上記のように民族的多様性が認められるが、スンバ人以外の民族が農村部に居住しているのはごくまれで、農村部は文化的に均質的な社会を成している。ただし、筆者が2011年に調査したパフンガ・ロドゥ郡のカムトゥック (仮名) は、東スンバ県のなかでも例外的な村である [小池 2013c 参照]。この村は、政府の推進するトランスミグレーション (transmigrasi) 政策¹²⁾ に従ってジャワ島から来たムスリムの移民を受け入れている。1982年にジャワ島から6世帯 (KK) がカムトゥック村にやって来た。そのうち、1世帯は全員がジャワに戻ったが、それ以外の5世帯はカムトゥック村に残り (成員の一部はジャワに戻った)、水田耕作に従事している。また、地元のスンバ人との通婚関係もあり (結婚に伴い、ジャワ女性がキリスト教に改宗したケースも、スンバ男性がイスラームに改宗したケースもある)、良好な関係が築かれている。

筆者はおもに東スンバ県で調査を続けてきたので、これまで東スンバ県における住民の移動についてまとめてきた。本節の最後にスンバ島の東部と西部¹³⁾ を比べると、西スンバの住民のほうが東スンバの住民よりも移動性が高いと言える。たとえば、上述のカムトゥックにも西スンバ出身者が居住していて、小規模な商売をしている。その要因について明らかかなことは分からないが、東スンバの住民から見て、西スンバの住民はより「攻撃的」(agresif) だとみなされている。

10) ブギス人は、南スラウェシに居住する民族で、インドネシアのなかでも移動性の高い民族として知られている。宗教はイスラームである。

11) 東スンバ県全体では、ムスリムの割合は6.2%だけである。

12) 人口過密なジャワ島の住民を人口密度が低い外島部に移住させ、地域間にみられる人口のアンバランスを解消させようとする国家的な政策。

13) スンバ島西部は、従来は西スンバ県 (Kabupaten Sumba Barat) だけであったが、西スンバ県から2007年に南西スンバ県 (Kabupaten Sumba Barat Daya) と中部スンバ県 (Kabupaten Sumba Tengah) が分立して、合計3県になった。

1-2 公的領域と家内の領域の変化

移動の問題を考えるためには、送り出す主体である家族と世帯の問題を考えなければならない。スンバ社会の家族と世帯を研究する上で、先ず家内の領域と公的領域を区別することが重要である（この点については小池 [2012a, 2013b] 参照）。スンバ社会で公的領域とは、土地所有・社会的地位（階層）・儀礼（祖先祭祀）に関係する。具体的には父系氏族（*kabihu*）と「家」（*uma*）という社会単位が重要である。氏族は、理念上、氏族の始祖（*marapu*）の父系子孫から構成される父系親族集団であり、氏族の成員の間の内婚は厳格に禁止される。「家」というのは、「マラブの家」（*uma marapu*）という、慣習に従って建築された家屋（慣習家屋）を儀礼の場としてもつ親族集団である。氏族が1棟の「マラブの家」しかもたない場合は、氏族と「家」が一致するし、一つの氏族が複数の「マラブの家」を持っている場合は、氏族が「家」という下位単位に分かれることになる¹⁴⁾。

家内の領域は生産・生殖・生計・養育に関係する。この領域に関係するスンバ語としては、*kalembi* と *kuru uma* という語を挙げることができる。前者は漠然と「家族」を指す語で、父系親族に限定しない、範囲が曖昧で、関係性を強調する時に使用される言葉である。一つの家屋に住む核家族を指すこともあれば、その姻族を含めて使うことがある。一方、後者は「家の中」という意味で、家族というよりも世帯に近い概念である。このように、スンバ語では明確な境界をもった「家族」（インドネシア語では *keluarga*）と世帯という概念は存在しない。

1980年代後半から現在に至るまで、東スンバ県では、いくつかの要因が絡まって公的領域に大きな変化が生じた。この点で、筆者の調査地であるハハル郡のウンガとパフンガ・ロドゥ郡のカムトゥックでは顕著な違いが認められる。ウンガでは、キリスト教への改宗者の増加¹⁵⁾の結果、公的領域の重要性が相対的に小さくなった。キリスト教に改宗した村人は、中核村ウンガにある「マラブの家」で実施されるマラブ儀礼（祖先祭祀）に参加しなくなる。キリスト教へ改宗した者にとって「家」はもはや存在しないのである。一方、カムトゥックでは、依然として公的領域の相対的重要性が大きいことは確かである。氏族と「家」という単位の団体が今日に至るまで存続している。カムトゥックの村人の多くはすでにキリスト教かイスラームに改宗している¹⁶⁾、ウンガの事例で取り上げたようなマラブ祭祀は公的領域とは関わりがない。公的領域の重要性は、貴族層を中心とする「伝統的な」ヒエラルキー

14) ハハル郡にある中核村ウンガ (Parai Wunga) における氏族と「家」については、小池 [2005] を参照。

15) 統計上1986年に東スンバ県の人口の37.6%を占めていた「マラブ教 (Agama Marapu)」の信者（正確には「その他の信仰」）は、2002年には17.5%になり、さらに2010年には12.0%にまで減っている [Kantor Statistik Kab. Sumba Timur 1987: 68; Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2003: 164, 2011: 198]。ただし、伝統宗教がどの程度が存続しているかは、スンバ島のなかでも地域によって異なる。

16) パフンガ・ロドゥ郡全体で「その他の信仰 (マラブ教)」の割合は、わずか5.5%である [Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2011: 198]。

が変わらずに続いていることと関係している [小池 2013c 参照]。

公的領域に変化が認められるが、婚姻と交換における氏族という外婚単位の重要性に変わりはない。スンバでは、男性は「母方オジの子ども」(*ana tuya*)¹⁷⁾と結婚すべきだという規範があり、妻の与え手と妻の受け手の間で一方的な女性の流れが成立している [小池 2005: 133-149参照]。妻の与え手と妻の受け手の間の縁組関係 (alliance) が社会的に重要な紐帯を創り出している。このような婚姻のシステムをレヴィ=ストロースは一般交換と呼び、基本構造の一つのタイプと考えた [レヴィ=ストロース 1977-1978参照]。慣習に従い妻の受け手 (夫側) と妻の与え手 (妻側) の間で婚資の交換が行われ、初めて婚姻は正当なものとなる。婚姻儀礼において、妻の受け手は馬 (時には水牛か牛) と金属の装飾品を妻の与え手に贈り、それと交換に妻の与え手は、豚と布・織物を妻の受け手に贈るのである。縁組関係にある二つの集団の間では、婚姻に関わらず様々な社会的な場で交換が繰り返される。その典型が死者儀礼である。葬儀に参列する集団は、個人との縁組関係に応じて儀礼財を持って参列する。

ウंगाでもカムトゥックでも、スンバの慣習にもとづく婚姻儀礼や死者儀礼への出費は時によって大きなものとなる [小池 2012a 参照]。たとえキリスト教またはイスラームに改宗していても、スンバ人にとって儀礼に付随する交換 (姻族との儀礼財の交換) は絶対を守るべき慣習 (インドネシア語で *adat*, スンバ語で *hūri*) である。このような儀礼に交換財をもって参加する単位は氏族ではない。貴族層では「家」が、それ以外では世帯が、経済的な自律性をもって儀礼に参加する。

家内的領域における世帯が生計単位として、その重要性を増している。中核村ウंगाの「マラブの家」の建築に手持ちの資金を提供するよりも [小池 2011: 103-106参照]、自己の世帯の住居である「畑の家」(*uma la woka*)¹⁸⁾を耕作地 (*woka*) に建築する、または現在の住居を改修することを重視する傾向が顕著である。さらに次節で取り上げるように、それぞれの世帯の生存戦略に従って、子どもの教育への投資が家計に占める比率が近年ますます高くなっている。

2 スンバ人の移動と教育

移動を考える上で最初に取り上げるべき問題は教育である。スンバの農村部に暮らす子どもたちにとって、自宅に留まっていたら、教育を受ける機会はかなり制限されてしまう。調査地のウंगा村のなかに小学校があり、隣接するナブ村には中学校がある。親がより教育水準の高い中学校、さらに高校に子どもを通わせるためには、東スンバ県の県庁所在地であるワインガブに住む世帯に子どもを預けることが必要になる。多くの親は下宿代を伴わない形

17) 「母方オジの子ども」と言っても、狭義の「母方オジの子ども」だけでなく、もっと広い範囲の女性親族が含まれる [小池 1995: 134-140参照]。

18) 耕地の一面にある居住空間としての家屋であり、建材や建築様式に関して、とくに慣習上の規制はない。この点で、慣習に従って建築される「マラブの家」とは対照的である。

で子どもを寄宿させ、進学させている。子どもの寄宿先として選ばれるのは、同じ父系氏族の成員だけでなく、妻の与え手（たとえば妻の兄弟）や妻の受け手（たとえば姉妹の夫）に当たる氏族成員の世帯である。同居していない娘の子、つまり孫などの付帯成員を当たり前のようには含み込む、ウンガの世帯の融通性の高さについて拙稿 [小池 2013b] で取り上げた。都市部では、このような世帯構成員の融通性の高さがさらに顕著である。ワインガブなど都市部に住み、県庁の公務員になるなど、ある程度成功をおさめたスンバ人の世帯の場合、農村部に住む親族の子どもを預かるのは当然の責務となっている。もちろん寄宿先で当の子どもは様々な家の雑用をさせられる。また都市部と農村部に住むスンバ人の間には互酬的な関係が成立していて、都市部の住人は必要に応じて農作物や家畜の提供を農村部の親族に求めることになる。このような親族ネットワークを考える時に忘れてはいけないのは、父系氏族が存在する社会だからといって、同じ氏族に属する父系親族だけでなく、縁組関係で結ばれた親族、つまり妻の与え手と妻の受け手も重要な役割を果たすことである。さらにまったく親族関係にない知人（場合によってはスンバ人以外）の世帯に子どもを預けることもあり、子どもの教育を支えるネットワークは親族に限定されているわけではない。

世帯の経済力によって異なるが、自分たちとは違い、可能な限り高い学歴を子どもには身に付けさせたいと、スンバ社会でも多くの親が考えるようになっている。子どもの教育は個々の世帯の生存戦略と深く結びついている [小池 2012a: 43-46参照]。学校教師と公務員が、農村に住むスンバ人にとって手が届く、ほぼ唯一の収入が安定した職業である。そのためには高等教育への進学が不可欠になる。ワインガブにスンバ・ウィラ・ワチャナ・キリスト教高等経済学校 (Sekolah Tinggi Ilmu Ekonomi Kristen Wira Wacana Sumba) という短大¹⁹⁾があるだけなので、スンバの高校生が4年制の大学で学ぶためには、島外の大学に進学しなければならない。たとえば東ヌサ・トゥンガラ州の州都クパンやジャワ島にある大学に子どもを進学させようとする時も、スンバ島内の移動と同様のメカニズムが働いている。ハハル郡ウンガ村に住むある世帯の例²⁰⁾を取り上げよう。世帯主は39歳（小学校卒）の農民（漁業でも現金収入を得ている）で、妻は40歳（小学校を卒業していない）で、子どもは6人いる。長男は21歳で現在、クパンのキリスト教系私立大学で体育教師になるための勉強をしている。18歳の長女と14歳の二女はワインガブに住み、高校に通っている。三女は7歳で自宅から小学校に通い、その他、5歳の二男と2歳の三男が家にいる。クパンで長男は以前ウンガに駐在していた灯台職員（父親と親族関係はないサブ人）の元に住んでいて、とくに下宿代は払っていない。一方、ワインガブに住む長女と次女は、それぞれ別の知り合いの元にて高校に通っている。

教育と親族ネットワークの関係を調べるために、中部ジャワ州サラティガにあるサティア・ワチャナ・キリスト教大学 (Universitas Kristen Satya Wacana) でスンバ出身者から話を聞

19) 2014年現在、4年制大学への移行を目指し、準備中である。

20) 教育に掛かる経費の詳細などは小池 [2012a: 43-45] 参照。

いた²¹⁾。この大学には、すでに複数のスンバ出身の大学教員がいて、その住居には同郷出身の学生が寄宿している。同郷ということは、たとえ系譜関係がたどれなくても、スンバの親族体系では何らかの関係で結ばれた親族を意味することが一般的である。スンバ人の教員によると、かつては寄宿している学生の学費まで負担していたこともあったようだが、今日は学費まで面倒をみることはなくなったという。親族の世話を受けて成功した人（大学教員や公務員になった人）が、今度は親族の子どもの世話をするのは責務であり、このように世代を越えて継続する互酬の関係が認められる。まだまだ高等教育修了者の数が少ないスンバ人の高等教育へのアクセスを考える時、このような扶助制度の貢献は大きいといえる²²⁾。ただし、すべてのスンバ人の学生がこのような扶助制度に頼るわけではなく、大学の学生寮を使ったり、またスンバ人のネットワークを煩わしいと感じ、他の地方から来た学生と同様に、下宿 (kost) を選ぶスンバ人も現れている。

3 バリへ渡るスンバ人

教育・就職のために島外へ出て行くエリート層の移動に加えて、商売のために国際的な観光地として有名なバリ島へ渡るスンバ人も現れてきた。1987年に定期船が就航し、ワインガプからバリ島へ比較的安価に行けるようになると、スンバ人やその他のスンバ出身者（サブ人や華人など）がスンバ独特の緋織の布²³⁾を持ってバリへ行くようになった。スンバの手織りの布は観光客向けにバリの土産物屋で数多く売られているので、彼らは土産物屋や外国人の買い手に布を売ろうとするのである。布の売り手のなかには、バリ島に住んで、布の商売を始める者も出てきた [田口 2001: 312-315]。

布の売り手はまだ散発的な人の移動だが、2000年代以降、仕事を求めてバリ島へ行くスンバ男性が増えてきた²⁴⁾。スンバは農業と家畜飼養がおもな生業であり、サービス業や製造業などの就職先がほとんど存在しない。彼らの学歴はせいぜい高校卒程度なので、バリでは小規模な工場（家具製造など）の工員や、守衛 (sekuriti)²⁵⁾ として働いている。同じスンバ島のなかでも東部よりは西部出身者が多いという。推定で5000人位のスンバ出身者がバリ島に住んでいて、「スンバ社会集団」(HIPMAS=Himpunan Masyarakat Sumba) と「スンバ家族紐帯」(IKES=Ikatan Keluarga Sumba) という、スンバ出身者の二つの組織 (organisasi) が

21) 2010年11月27日から12月1日までサラティガに滞在し、調査を実施した。インフォーマントのなかには、祖父がウング出身の教員がいる。彼はウングでの調査にもとづき、2010年に博士学位論文を完成させた [小池 2014: 280]。

22) このような扶助システムは、東ヌサ・トゥンガラ州の他の諸民族の間で同様に認められるわけではなく、とくにスンバ人の中で強いという。

23) 経糸を括って染めることで具象的なモチーフを描きだし、腰機で織りあげる経緋が東スンバ全体で有名である [小池 1998: 100-104]。スンバやその他の東ヌサ・トゥンガラ州各地で織られている布は、「括る」(ikat) という工程から、インドネシア語で一般にイカットと呼ばれている。

24) 2012年3月27日にワインガプ出身でバリに住むスンバ人男性ギク (仮名) から話を聞いた。なお、この時のバリでの調査は、バリ在住の石井美和氏 (看護師として国際ワークキャンプに協力している女性) の尽力のもとに実施された。ここに感謝の意を表したい。

25) バリ人から見ると「粗野な」(kasar) 風貌のスンバ人は、守衛に向いていると言われる。

存在する。また、スンバ出身者はおもに州都デンパサールの南デンパサール郡セセタン町 (Kelurahan Sesetan, Kecamatan Denpasar Selatan)²⁶⁾ やバドゥン県北クタ郡ダ alun 村 (Desa Dalung, Kecamatan Kuta Utara, Kabupaten Badung) 近辺に住んでいる。キリスト教徒が多いので、セセタンにあるプロテスタント系教会 (GBI=Gereja Bethel Indonesia)²⁷⁾ が日曜日にスンバ人の集う場所、つまりスンバ人のネットワークの結節点となっている。

上記の概要を語ったギク自身のライフ・ヒストリーを紹介しよう。彼はワインガプ出身の35歳のスンバ人で、父親は公務員 (PNS=Pegawai Negeri Sipil) である。ワインガプの専門技術高校 (SMK=Sekolah Menengah Kejuruan) でマネジメントを学び、2000年にバリに渡った。家具製造業で働き、当初、日給はRp8,000 (約80円) だけで、ギリギリの生活だった。今は3人目の雇用主 (華人) の下で家具製作の仕事をしている。働き手をスンバから求めたいと思っているが、最近スンバから渡ってくる人は給料が安いと言って、すぐにスンバに帰ってしまう。今の若者は自分の頃とは違うと語る。家具作りの他に、スンバの布を扱う商売を家計の足しにしたことがある。最初は売れたが、結局は儲からなくなって止めた。妻はサブ・スンバ人 (Sabu-Sumba)²⁸⁾ である。ワインガプ生まれだが、両親とともにバリに来て、バリの中学校と高校を卒業した。バリ語も話せ、大理石屋で働いている。彼は教会で妻と知り合い、2009年に正式に結婚し、6歳と1歳の子どもがいる。バリに住んでいても、婚姻に関するスンバの慣習を守らなくてははいけない。ただし妻がサブ・スンバ人なので、ギクの家族が妻側に渡した婚資 (マムリという装飾品と馬) はそれほど多くなかった。バリの彼の住居には、彼を頼ってスンバから来た親族が住んでいるわけではない。彼の希望としては、将来、妻子をバリに残して一人でスンバに戻り、何かビジネス (bisnis) を始めたいと考えている。とはいえ、ワインガプでは華人が経済をほぼ独占し、ジャワ人やバリ人がその隙間で商売している。一方、スンバ人は公務員になるだけで、商業分野で成功した人はいないと、ギクは語っている。

4 バリのスンバ女性労働者

これまでバリ島へ働きに行くスンバ人は男性ばかりだったが、近年は女性もバリ島に渡るようになっていく。男性労働者の場合は自分の意志で、業者などの仲介を経ずにバリに渡るケースが普通である。一方、女性の家事労働者については斡旋業者が介在している。デンパサールにある家事労働者斡旋業者から話を聞く機会があった²⁹⁾。経営者はロンボク人で、すでに12年間バリで営業している。以前はロンボクとバリの女性を斡旋していたが、2005年か

26) セセタンはオランダ統治時代からキリスト教に改宗したバリ人が集住していた地域である。国際ワークキャンプの訪問先であるキリスト教徒の村プリンビンサリにも、セセタン出身者の子孫が住んでいる。

27) 信徒は約200人で、そのほぼ半数がスンバ人である。この教会の牧師はマナド系のインドネシア人である。

28) 本人またはその親など上位世代が、スンバ人とサブ人の通婚によって生まれた人を指す。

29) 斡旋業者およびバリ在住のスンバ人労働者からの聞き取りは、2012年3月27日に行われた。

写真1 バリで働くスンバ女性アンナ



らスンバ女性が来るようになったという。バリの女性は今ではプライド（gengsi）のため、外国人家庭で働くなら良いが、一般のバリ人の家庭では家事労働者として働きたがらなくなった。また、豚肉を食するバリ人の世帯で、イスラーム教徒のジャワ女性が家事労働者として働くことは難しいので、豚肉の禁忌のないキリスト教徒であるスンバ女性など東ヌサ・トゥンガラ州出身の家事労働者がバリで急増している。また、子守を除いて、この斡旋業者はとくに学歴上の制限を設けていないので、小学校すら卒業していないスンバ女性が働いていることもある。

家事労働者として日本人女性³⁰⁾の家族で働いているスンバ女性アンナ（仮名）の例を紹介しよう。南西スンバ県コディ・バンゲド郡（Kecamatan Kodi Bagedo, Kabupaten Sumba Barat Daya）の生まれの19歳である。父親が小さな時に亡くなり、さらに実の母も死去したが、2人の義母³¹⁾がいる。同母兄弟姉妹は7人（男子5人、女子2人）³²⁾で、その中の3番目であり、その他、異母兄弟姉妹が10人いる。家族は水田を所有している。父と生母がいない家庭環境のため、小さな時から実家ではなく、東スンバ県レワ郡（Kecamatan Lewa）の父方オジ³³⁾の元で暮らしていた。まったく小学校に通っていない。実の姉（近所で家事労働者として働く）や村の人が数多くバリで働いているので、彼女もバリで働くようになった。

30) 夫はバリ人で観光業に勤め、この日本女性はとくに仕事に就いていない。

31) この父親はキリスト教徒ではなく、一夫多妻婚を実践し、3人の女性と結婚していた。

32) 彼女の弟妹は義母の元で暮らしている。

33) このオジ自身が、最初はマレーシアの建設現場で働き、その後、シンガポールで働くようになった。

1年契約で月給はRp 600,000(約6000円)である³⁴⁾。バリに行く前は斡旋業者(Yayasan)³⁵⁾に手数料など何も払っていない。業者の主人が逃げようとする女性を殴るので怖かった。最初2ヵ月間はバリ人の家庭で働いたが、いったん業者の元に戻り、そして現在の日本人女性の家庭で働くようになった。クリスマスに帰って、稼いだお金を直に弟妹に渡したい。直接渡さないと親族に取られてしまう心配がある(だから親族から頼まれても、けっして送金しない)。業者にお金を渡すと、帰りの飛行機便と空港までの迎えを手配してくれる。バリに来た時は船を使ったが、帰りは現金を持って帰るので、飛行機で帰りたいと思っている。

9ヶ月前からアンナを雇っている日本人女性にも話を聞いた。アンナとは別に、以前から雇っているバリ人の通いの「お手伝いさん」がいて、小さな子どもの面倒をみている。アンナで3人目で、最初の2人(スンバとロンボク出身)は長続きしなかった。この女性が料理を作り、洗濯機で洗濯している。アンナは電化製品の使い方を知らないの、任せている仕事は皿洗いと掃除程度である。アイロンかけは危険なのでさせない。この日本人女性の話のように、電気がないスンバでの生活と、バリの雇主家族の生活とがまったく違うので、アンナにとって適応が難しく家事労働者としての能力は低いようである。そのことは、「辛抱が大事。仕事させるというよりも、教えるという気持ちが必要」という雇用主の言葉によく表れている。

海外へ家事労働者として働きに出るジャワ島の女性が増えた結果、ジャカルタなどの都市部では家事労働者の成り手が不足するという事態になっている。現時点で、電化製品の使い方など都会的な生活様式に慣れてなくて、家事労働者としての適性に問題があるにせよ、スンバ女性がジャワ島にまで家事労働者として働きに出ることも将来的には十分に考えられる。

お わ り に

本稿で報告したスンバ人の移動に関する資料をここで簡潔にまとめ、本稿の結びとしたい。大学への進学のために子どもをジャワ島など島外に送り出す場合、スンバ島内で子どもを何らかのつながりのある世帯に寄宿させるのと、ほぼ同様のパターンが認められる。スンバ島内であれば島外であれば、子どもの寄宿先として選ばれるのは、同じ父系氏族の成員だけでなく、縁組関係にある親族、つまり妻の送り手や妻の受け手の世帯であり、さらにまったく親族関係にない知人の世帯に子どもを預けることもある。もともとスンバ社会全体に認められる開放的で融通性の高い世帯構成[小池 2013b 参照]が、子どもの進学を支えるネットワークを生み出している。

34) 2011年9月14日にカラワン県で、村長夫人から聞いた話では、インドネシアで「家政婦」(pembantu)をしても、月に300,000ルピア(約3000円)にしかならず、この額では誰も働く気にならないという。もちろんインドネシアの家事労働者の月給には幅があるだろうが、アンナが得る600,000ルピアという額は、とくに技能をもたない女性が得る月給としては低くはないようだ。

35) ほんらいyayasanはインドネシア語で非営利組織を指す語であるが、斡旋業者を指す語として、広く用いられている。

スンバ男性のバリへの移住については、今回が初めての調査である。ギクから聞く限りでは、バリ島への移住はまだ単発的なレベルにとどまっていた、親族を頼って次から次へとスンバ人がバリに働きに出る連鎖移住 (chain migration) と呼べるような段階にはなっていないと考えられる。ギク自身のバリ行きは世帯の生存戦略に組み込まれているというよりも、彼の自発性によるものである³⁶⁾。この点が、世帯主が教育資金を何とか捻出して子どもを島外の大学に送ろうとする世帯の生存戦略 [小池 2012a: 43-45参照] とは異なっている。ただし、ギクの話で興味深いのは、彼自身と妻の家族がバリに住んでいても、双方のスンバに住む家族から切り離された存在ではないということである。婚姻に際しては、夫側と妻側の親族が関わって、スンバの慣習に従い交換が行われた。

バリで働く家事労働者については、サウジアラビアや台湾に行く移住労働者と同様に、村内や親族の間でバリ島へ働きに出る女性がいると、それがきっかけとなって働きに出るケースが多い。上記のような連鎖移住とは少し違うが、アンナの出身村では多くの女性がバリに働きに出ている。ただし、斡旋業者が介在しているので、勤務先を自由に選べるわけではない。アンナの場合はたまたま姉の近所で働くことができたが、斡旋業者の都合で姉妹が離れた地域で働くこともありうる。アンナの事例で興味深いのは、送金の問題である。実の父母の死去という事情のためだが、彼女の強い意志で、送金の対象を亡き父親の世帯ではなく自分の弟妹に限定している。従来、工場などでの雇用が存在しないスンバでは、低学歴の農村部の若い女性が就職する機会がきわめて限られていたが、バリでの家事労働は彼女らに自己裁量で使える収入を得る手段を与えたと言える。

以上取り上げた、どの点についても、現時点では調査研究を開始したばかりで確実なことは何も言えない。今後、バリ島在住のスンバ人に対する聞き取り調査を続け、現代インドネシアにおける人の移動について考えていきたい。それが「はじめに」で言及した、日本とインドネシアとの文化的交流をより深化させるために必要な基礎的な研究に貢献するものと考えている。

参考文献

- Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2003, *Sumba Timur dalam Angka 2002*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.
- Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2011, *Sumba Timur dalam Angka 2011*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.
- Fox, J. J., 1977, *Harvest of the Palm: Ecological Change in Eastern Indonesia*, Cambridge: Harvard University Press.
- Kantor Statistik Kab. Sumba Timur, 1987, *Sumba Timur dalam Angka 1986*, Waingapu: Kantor Statistik Kab. Sumba Timur.
- 小池誠, 1998, 『インドネシア——島々に織りこまれた歴史と文化』三修社。

36) 2011年に東スンバ県ハハル郡の2村で世帯調査 [小池 2012a 参照] を実施した時、カダハン村からバリへ働きに出ている息子の存在が明らかになった。父親はこの息子から定期的な送金を受取っていないと語っていた。このケースも、世帯の生存戦略と無関係な自発的な移住である。

- , 2005, 『東インドネシアの家社会——スンバの親族と儀礼』 晃洋書房。
- , 2010, 「スンバで家を建てること——インドネシアとの文化的交流を深めるためのプロジェクト報告(1)」『桃山学院大学総合研究所紀要』36-1: 195-211。
- , 2011, 「スンバで家を建てること——インドネシアとの文化的交流を深めるためのプロジェクト報告(2)」『桃山学院大学総合研究所紀要』37-1: 93-108。
- , 2012a, 「インドネシア・スンバ島における世帯と家計の人類学的研究」『桃山学院大学総合研究所紀要』38-1: 27-48。
- , 2012b, 「台湾におけるエスニック・メディアが作り出すインドネシア女性労働者のネットワーク」『国際文化論集』(桃山学院大学総合研究所) 46: 1-31。
- , 2013a, 「インドネシア人帰還移民の社会福祉活動——台湾からインドネシアへ」伊藤真編『東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究』平成22年度～平成24年文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書, 首都大学東京社会人類学研究室。
- , 2013b, 「インドネシア・スンバの父系社会における家族の多様性——家族圏再考」『比較家族史研究』27: 7-26。
- , 2013c, 「インドネシア・東スンバ県パフンガ・ロドゥ郡の村落社会における世帯と経済」『桃山学院大学総合研究所紀要』39-1: 45-61。
- , 2014, 「インドネシア・スンバ島におけるキリスト教の歴史と現状」『桃山学院大学キリスト教論集』49: 273-286。
- レヴィ=ストロース, 1977-1978, 『親族の基本構造 上・下』(馬淵東一ほか訳), 番町書房。
- 桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプ実行委員会, 1997, 『アジアの人々の協働から学ぶ——桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプの歩み』聖公会出版。
- 田口理恵, 2001, 『布作りと「社会」形成——インドネシア・スンバ島の在来製布技術と経済発展に関する文化人類学的研究』お茶の水女子大学博士学位論文。

(2014年5月7日受理)

Migration of the Sumbanese to the Island of Bali, Indonesia

KOIKE Makoto

This is the second report on the “Project for Developing Cultural Cooperation between Japan and Indonesia,” which was conducted from 2010 to 2012. The aim of this paper is to elucidate domestic mobility in modern Indonesia, focusing on the Sumbanese working on the island of Bali. Historically, the Sumbanese have been a less mobile ethnic group than the Savunese and Rotinese in the Province of East Nusa Tenggara. However, in addition to Sumbanese students leaving for other islands to acquire a higher education, since the 2000s, Sumbanese men have migrated to Bali to work for small-scale factories and as security guards because there are few available jobs in Sumba. On Sundays, they gather at a Christian church in Sasetan, which serves as a nodal point of their ethnic network. Though they live far from their native villages, they have to obey the local customs related to marriage and exchange. In addition, Sumbanese women have migrated to Bali, mainly serving as domestic workers. As Balinese women are no longer willing to work as domestic workers, agencies in Bali are recruiting women from Sumba and other islands in East Nusa Tenggara. Due to working in Bali, women from Sumbanese rural areas now have disposable income for the first time. Sumbanese migrant workers go to Bali on their own initiative, not for their households’ survival strategy. As these findings are just preliminary, further research should be conducted to delve deeper into the Sumbanese mobility.